遺風

たとへば大正元年の如き、崖から千米あたりまで、大木も小草もひとつ残らず奪ひ去り山肌一面を一夜のうちに赤剝けにして、裾近い官営移民村吉野村から、家も着物も、一吸りの塩さへも吹き飛ばしたことがあった。

——《南方移民村》

移民村散策

日本統治期間、台湾総督府は「東台湾を内地化する」という政策を実施しており、日本国内の人口過多の問題を緩めるために、1910年（明治43年）から、東台湾における官営移民村を設立し、熱帯栽培業を進めました。台湾東部へのこの時の官営移民政策が終わった後も、台湾島内での移民は続き、民間企業による私営移民村の形成も行われました。

当時、東台湾の移民村は十個余りあり、主に四国と九州の出身者が多く、移民の身の上と品徳を調査されました。また、吉野、豊田、林田などの移民村の地名は今に至るまで、ずっと残っています。

日本出身の作家濱田隼雄の「南方移民村」という小説には、台湾東部に移住した北海道からの、貧しく土地を持たない農民のグループが不毛と言える土地でサトウキビを栽培し、伝染病など様々な災害や戦争を乗り越える様が描かれています。

物語の舞台である鹿田村は台東県鹿野村が舞台になっています。ストーリーは一人の女の子が隣村である池野村へ嫁ぐという内容です。それは当時の池上移民村を描いています。物語はノンフィクションに近く作者は日本人移民の悲願を物語の中で再現しています。これらのユートピアの想像は花東縦谷に深く刻み込まれ、懐旧ランドスケープが巻き起こりました。

Taiwan 交通部観光局
花東縱谷国家風景区管理処
廣告

吉野村（現花蓮県吉安郷）

吉野移民村は日本統治時代に最初の官営移民村として設立され、もとアミ族七脚川社（Tsikasowan）の居住地に建てられました。「七脚川事件」の後、1910年（明治43年）、台湾総督府は花蓮港庁の荖蘭社に荖蘭移民指導所を設置しました。最初の移住者グループは徳島県吉野川流域の出身者が多かったため、この地を故郷の川にちなんで「吉野村」と名付けました。吉野移民村は主にサトウキビ、煙草、稲を栽培していました。

吉野村移民事業の計画に基づき、村は宮前、清水、草分3つの集落からなっていました。宮前の開発はその中で一番早く、移民村の公共設備が完備されました。村内の吉野拓地開村碑と神社鎮座記念碑はずっといままで残されており、台湾の日本官営移民史の証人とも言えます。

豊田村（現花蓮県寿豊郷）

賀田金三郎は1899年（明治32年）に「賀田組」を設立し、日本の移民を募り、サトウキビを100甲余り（約100ヘクタール）も開墾しました。「賀田村」は東台湾で初めての私営移民村となりました。賀田組の発展は順調ではなく、1913年台湾総督はそれを引き継ぎ、豊田移民村が正式に設立されました。

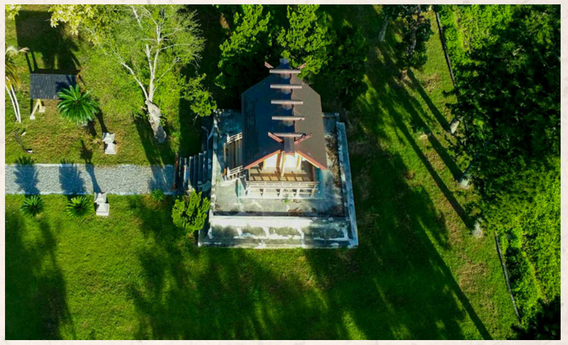
豊田移民村は豊坪、豊裡と豊山、三つの村にわかれ、現在の地図上には「豊田村」という日本統治時代の地名はありません。しかし、地元住民は現在でもまだ豊田と呼んでいます。豊田駅の名は変わらず、そこから歴史を垣間見ることができます。

林田村（現花蓮県鳳林鎮）

林田村は現在花蓮県鳳林鎮の北林里、大榮里で、北から南へ見ると北林、中野、南岡三つの部落にわかれていました。付近には平地林が広がり、水田に適した土地もあり、そのゆえに林田という地名を付けられました。

1913年（大正2年）に四国からの移民が到着しましたが、自然災害が相次ぎ、深刻な被害に遭遇しました。さらに、「鳳林熱」という疫病の一種（ツツガムシ病）がはやり、村民全体の10分の1が死亡し、多くの移民が帰国しました。

林田村の主な作物はサトウキビ、稲、煙草で、黄色種煙草は台湾総督府専売局に提供し、「ジャスミン香りたばこ」として、出荷しました。一つの世帯あたりに提供された土地は広く、総督府は本島人に日本人移民と協力し、耕作することを奨励しました。そのため、日本人の移民村の周辺がいわゆる「台湾村」になりました。



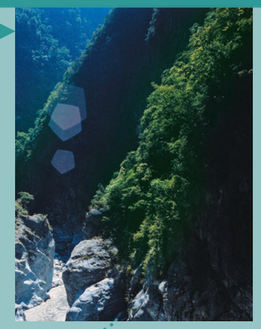
鹿野村（現台東県鹿野郷龍田村）

第一世界大戦後、国際的な砂糖価格が急騰し、1915年（大正4年）台東製糖株式会社が鹿野村を設立しました。それは台東庁（当時の州のひとつ）で最も早く、最大の移民村となりました。終戦後、日本の移民が全部本土に引き揚げました。開戦に始まり終戦に終わった移民村と言えるでしょう。

移住者たちは主に雪国の新潟からの小作農であり、サトウキビを栽培していました。しかし、製糖会社の資金不足による経営不振、不十分な農水施設、食糧不足、さらに台風やマラリア、野生動物に畑を荒らされるなど様々な不測の事態が重なり、当時の移民の困窮した生活を想像することは難しくありません。元々寒い北国から来た移民達は南国での暖かで豊かな暮らしを期待していましたが、ついにそれが叶うことはありませんでした。

峡谷の旅、路地裏・文芸めぐり

タロコ国立公園



タロコ渓谷の絶景は日本統治時代から、有名でした。1935年（昭和10年）台湾総督府は大屯山、新高阿里山と次高タロコを国立公園の候補地として指定しました。大衆は宣伝のため、日本の有名な写真家である岡田紅陽を招き、三ヶ所の候補地の絶景を写真におさめました。さらに、台湾国立公園協会花蓮港庁支部は八つの写真を取り上げ、「大タロコ偉観」という絵葉書を発行しました。

1937年（昭和12年）12月27日、タロコ一帯が本格的に国立公園を指定される、正式には「国立公園大タロコ峡」とされました。同年の7月、日中戦争が勃発し、そのため、国立公園の指定作業が白紙に戻ってしまいました。戦後、タロコは1987年にようやく国立公園として正式に建立されました。

松園別館

1942年（昭和17年）4月1日、花蓮港兵事部が正式に始動しました。中央の建物「兵事部」は、和洋折衷の様式で、碑木、鋼筋とセメントの混合で造られた2階建ての洋館。1，2階に回廊がありますが、屋根は瓦なので、東西がミックスした建築と言えます。また、太平洋が見渡せる高台に設置されたので、視野は良好、美崙溪の入海状況もはっきり見えます。太平洋戦争時の重要な軍事指揮センターでした。

園区と周辺の放送局、海岸ラジオ局、水道局の一帯は、琉球松が植えられており、古風な素朴さと自然な風格を漂わせています。

将軍府（美崙溪畔日本式建築群）

美崙溪畔に位置する日本式建築群は当時陸軍指揮官だった中村大佐の宿舎を中心に、一戸建て建築と連棟式があります。日本人が引き揚げた後も、住居は残りましたが、ほとんどは当時のままです。塀と門は昭和期のものです。

当時の台湾人はそこに将軍が住んでいるため、「将軍府」と呼び、いまでもその名が使われています。美崙溪下流には九つの部類です。頭部は高く突起し、色は茶色もしくは黒であり、台湾劇曲に登場する将軍を彷彿とさせます。それがもとで現地住民に「蟹将軍」と呼ばれています。

花蓮文化創意園区（元花蓮港酒造工場）

1913年（大正2年）宜蘭振拓産業株式会社は花蓮港街に1520坪の土地を借り、「花蓮港工場」を建設しました。主な製品は赤ワインと米酒でした。その後、「臺灣酒專賣令」によって、酒類の生産は総督府が管理することになりました。1944年（昭和19年、太平洋戦争が勃発、「花蓮港工場」が空襲の目標の一つになり、三分の一の工場が空襲によって、破壊されました。

戦後、酒造設備はまだ機能しており、1988年に花蓮市の美崙に移設されました。旧工場跡地は、現在花蓮文化創意園区として再利用され、展示会や各種イベントが行なわれるなど、花蓮の文化を発信する主要エリアになっています。

花蓮鉄道文化園区

1909年（明治42年）臺灣總督府は花蓮・台東間の鉄道建設計画を承認し、建設費用は直接日本国会から支給されました。花蓮駅から璞石閣に至る長さ87.3キロの東部鉄道路線を建設するために「台湾総督府鉄道部花蓮港出張所」が設置されました。

東線鉄道の規格は花東縦谷の地形に従い、軌間762mmの軽便鉄道でした。1926年台東線全線が開通しました。それと共に、花蓮港の築港のため、花蓮港駅から築港の臨海鉄道を敷設し、縦谷の物産が簡単に日本本土に運輸できるようになりました。

東線鉄道が開通した後、花蓮港駅の近くにはにわかに活気づき、駅前の「黒金通」はその商業繁盛の時代の証人ともいえます。1970年ごろ北迴線が開通し、花蓮駅が新駅に移したにもかかわらず、旧駅のエリアは未だに重要な商業エリアとして残っています。花蓮港出張所はのちに修復され、蒸気機関車と鉄道に関する文物を展示しており、これが台湾で唯一の軽便鉄道の歴史展示園区となっています。

官営移民村の旅

慶修院

国家第三級古蹟に指定された慶修院は、元真言宗高野山派吉野布教所であり、当時の移民達の心の拠り所でした。建築様式は本造で、江戸情緒を感じさせます。屋根形式は「宝形造（ほうぎょうづくり）」です。

境内には、八十八尊石佛などがあり、これは当時の建築監督であった川端満二が実際に四国から持ち帰ったそうです。慶修院は節季にのっとり毎年納涼季を執り行い、年越しのイベントなども行っています。訪問者は日本文化独特の雰囲気を味わうことができます。

豊田移民村の歴史をめぐり

豊理国民小学は以前の豊田小学校でした。小学校の隣に当時の移民指導所の事務室があります。

当時の警察官の庁舎は長らく放置されてきましたが、修復工事が行われ、「客家生活館」として生まれ変わりました。そして、豊田神社はすでに碧蓮寺に改称しました。また、中山路と民権路の交差点には豊田神社の鳥居が残っています。鳥居から約1キロ参道を歩いていくと、碧蓮寺に着きます。ここには豊田村の開拓記念碑や狛犬、石燈籠、不動明王などが残っており、地元の宗教と一体になっています。

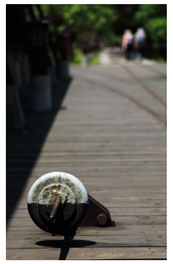
林田移民村の歴史をめぐり

台湾で初めてスローシティの認証を受けた花蓮県の鳳林は、移民時期の遺跡を残し、一見に値する文化的な観光スポットが豊富にあります。

長年の時を経て荒廃した林田神社は地元の人々と地方政府の努力の上、鳥居、参道、石灯籠などを建て直しました。神社本殿の跡地に囲まれた玉垣にはまだ奉納者の名前が残っています。

村にはたくさんの日本式の「煙楼」があり、林田警察官吏派出所も修復されました。鳳林支庁長官の官舎は鳳林中学校の初代校長を務めた張七郎氏の宿舎でした。現在は改修され「校長夢工廠」として機能しています。「校長夢工廠」は住民の教育を重んじ、1945年から今に至るまで90位余りの学校長をこの地域から輩出しました。

林田文化事業園区



花蓮に住んでいるお年寄りはよくここを「森坂」と呼んでおり、「林田山」とは呼びません。1918年（大正7年）このエリアで初めての伐採作業が始まり、1938年以後大規模な伐採作業が行われ、木材運搬のための鉄道や索道、集材器具などの関連設備も設けられました。林場で働く人々のための宿舎や医務室、購買所、米店、雑貨屋、洗濯屋、理髪部、消防隊および幼稚園や小学校なども建設されました。当時の林田山林場はひとつの生活圏として完全な機能を備えていたのです。全盛期には四百、五百軒の民家が並び、人口は2000人あまりにも達していました。そのため、このようなにぎやかな場所はかつて「小上海」と称せられました。

1987年に林場は天然林の伐採がおわり、日本式建築群の保存が活発になりました。庁舎だけでなく一般家屋も全て残っています。台湾でも有数の規模をもつヒノキ家屋です。これらは林田山林業文物展示館内に陳列されており、林田山の歴史を知ることができます。

花蓮観光糖廠

サトウキビは日本統治時代に重要な経済作物であり、サトウキビは砂糖を作るだけではなく、糖蜜を使い、蒸留して粗製のアルコールを作ることができ、軍事利用されました。

1913年（大正2年）東台製糖株式会社が「花蓮港製糖所」（現寿豊郷）を開設しました。1921年（大正10年）拡大生産のため、「大和工場」（現光復郷）を設けました。現在の大農大富平地森林はかつては見渡すほどのサトウキビ畑が広がっていました。

第二次世界大戦末期、寿工場と大和工場二つの製糖工場はアメリカ軍の爆撃に遭い、破壊されてしまいます。戦後、台湾糖業公司が引き継ぎ、損害のひどかった寿工場は取り壊しが決められましたが、大和工場は修復工事が行われました。その後大和工場は花蓮糖廠と名を改め、東部地区における製糖の中心となりました。2002年製糖を停止し、観光施設として発展していくこととなりました。ここでしか食べられないアイスクリームは食べる価値があります。修復が終わった当時の日本式宿舎は現在では、宿泊施設として運営されています。以前工場が稼働していた時とは違い、今では静かで、落ち着いた町にと姿を変えています。

瑞穂、紅葉温泉エリア

瑞穂温泉は1919年（大正8年）開発されました。しかし、温泉といっても、実際は和風旅館「滴翠閣」付属の銭湯でした。紅葉温泉は日本統治時期の警察療養所であり、見た目は日本式の建物で、床はすべてたたみです。前者は「外温泉」と呼ばれ、山近くの紅葉温泉は「内温泉」と呼ばれていました。

冬はあったかい温泉で観光客を惹きつけ、夏は秀姑巒溪ラフティングで、汗を流した観光客にとって、この二ヶ所の温泉はどちらも格別の楽しみです。

温泉・文化財・レトロ散歩

玉里社跡地

台湾総督府が「理蕃」政策を行っている間、原住民族の伝統領域に強制的に進入し、激しい衝突が常に勃発していました。玉里神社は八通関古道東段の入り口に位置し、日本警察が入山する前、凶猛なブヌン族に面して、先に神社で参拝して、無事に帰れるように祈ったそうです。

二次世界大戦中、玉里の青年張火茂が出征する前に、神社の前で新婚写真を撮りました。戦後初期にはまだ、地元の住民たちの間に参拝の習慣が残っていました。

もと出征兵士だった張火茂氏が亡くなる直前に神社を回想したこともあり、神社は定期的に整えられていました。

両側を木々に囲まれた山道を歩き、二番目の鳥居を過ぎれば、厳かかつ澄んだ雰囲気を感じられます。しかし、山頂の拝殿はすでになく、わずかに残った社殿の基礎が以前にここに神社のあったことを感じさせるだけです。

安通温泉

安通温泉は花蓮県で瑞穂温泉、紅葉温泉と並び、重要な温泉地であり、この温泉は1904年（明治37年）に山に樟脳を刈りに来た日本人が川端で発見しました。1930年（昭和5年）ここで警察招待所を設立したとともに公共風呂場も設けられました。

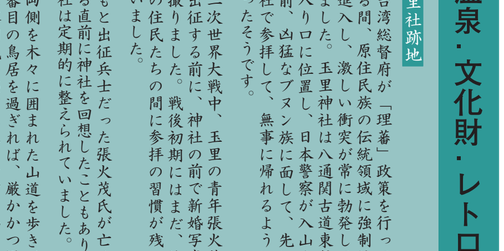
戦後、民間の業者がこの温泉の経営権を買いとり、日本式の建物をそのまま保存しました。保存状態はとてもよく、たくさんの日本人観光客が訪れています。山に抱かれ、霧が満ち満ちた温泉から見る景色は格別です。

関山警察史蹟文物館

大人が子供を怖がらせるときに最も好んで使うのは、「警察に連れて行くぞ！」の一言。そんな怖いイメージのある警察署ですが、関山警察署には日本式建築物や景観に富む庭園など文化的な雰囲気が充満しています。

親切な解説員と共に日本統治時代の駐在所事務所内に入れば、収蔵されている当時の文献や史跡資料などを見ることができます。もっとも特別なのは「防空警報器」で、訪れた人は実際に操作を体験することができます。それぞれ違う時代の資料を読み解けば、今も昔も警察の仕事は楽じゃないことがわかるでしょう！

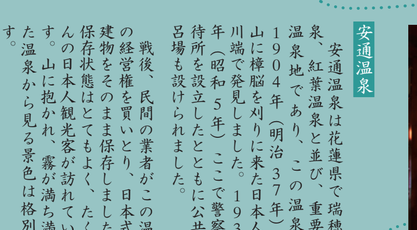
鹿野神社



鹿野神社は無格社で、日本国家神道の一つです。開拓三神と北白川宮能久親王を奉っています。宮司は台東神社の宮司が兼官し、通常は鹿野村村民会会長の田久保健治が代理を務めていました。神社のつくりは簡素で、本殿、鳥居、手水所があるのみです。

花東縦谷国家風景区管理部は住民の意見を受けて、日本の技術「宮大工」の協力のもと修復工事に着手しました。二年以上の工期を経て、2015年に完成、戦後最初の対日合同神社修復事例案になりました。

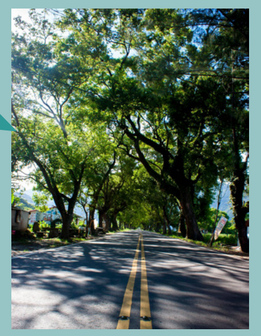
賓朗（檳榔）旧駅舎



1922年（大正11年）に建立されたこの駅はもともとの名を「日奈敷乗降場」と言いました。日奈敷（ひなしき）とは現地の原住民語〝pinaski〟由来しています。1943年に「日奈敷乗降場」へと変わり、その後さらに〝pinaski〟と音の近い〝檳榔（びんろう）〟へと名を改めました。

檳榔駅は勾配が1000分の21にもなり、折り返し式線路の東線鉄道の回線に伴い廃駅になりました。廃止となった駅の中で現存するもっとも古い日本式木造駅舎です。周辺には老木が影をつくり、古い駅舎と相まって趣があります。

緑のトンネル（綠色隧道）



国道9号線を南に走り、台東市内に入る手前に2キロ近くにも連なる樹木を見ることができます。その様子はまるで緑の傘を差しお客を歓迎しているように見えます。実は戦時中に使われていた道路だとは想像するに難しいでしょう。

台湾総督府は第二次世界大戦中の軍事運輸の要求に従い、軍事用の道路を整備、その周りにアカギを植樹しました。台東市から初鹿まで伸びたその道は、総距離15キロにもなりました。

戦後、都市開発計画による道路の開発を受け、アカギの木々もゆっくりと消えていきました。地元の声を受け、アカギの最後の一群は保護され、台東市を代表するスポットになっています。